

サルトル、シモーヌ=ヴェイユ

2019 年本試

問 6 サルトルの思想の説明として**適当でないもの**を，次の①～④のうちから一つ選べ。

34

- ① 人間は，自己と自己を取り巻く社会の現実に関わらざるを得ないが，全人類への責任を自覚し，自ら進んで社会へ身を投じることで，現実を新たにつくりかえていく可能性に開かれている。
- ② 人間は，絶えず自らを意識しながら，自らを新たに形作ろうと努める存在であるため，いかなる状況においても変化しない，同一の本質をそなえた事物とは異なっている。
- ③ 人間は，自由であることから逃れられず，自由であることから生じる責任を他者に委ねることもできないため，不安に耐えて，自己と自己を取り巻く社会の現実に関わらざるを得ない。
- ④ 人間は，あらかじめ自らの本質が定められており，その本質を実現するために自らを手段として活用することによって，未来の可能性を切り開いていく，自由な存在である。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 6	34	④	3

2018 年追試

問 7 次の文章は、哲学者のシモーヌ・ヴェイユが自発性と責任について述べたものである。その内容の説明として最も適当なものを、下の①～④のうちから一つ選べ。 7

自発性と責任とは、役に立つ存在、さらには不可欠な存在であろうとする感情のことであり、人間の魂の生き生きとした欲求である。

だが、失業者の場合、それらが完全に奪われてしまっている。たとえ、その人が衣食住に困らないよう保護されていても、事態は同様である。……自発性と責任という欲求が満たされるためには、次のような条件が必要である。第一に、自分とは直接利害関係がなくとも、自分と何らかの関わりがあると思われる様々な問題に関して、意志決定を下し得る場合があること。第二に、自分が絶えず努力を惜しまないこと。最後に、自分が属している集団の活動に関して、たとえ何の決定権も意見する余地もない場合であれ、思索をめぐらすことによって、その集団の活動全体を自分自身の事柄とみなせること。

(『根をもつこと』より)

- ① 人間は自分が役に立つ、必要とされる存在であることを欲する。だが、仕事を失った人はそのような欲求をもてなくなってしまうため、衣食住の保護を求めることを通じて、自らの意欲を引き出さねばならない。
- ② 人間は自分が役に立つ、必要とされる存在であることを欲する。その欲求を満たすためには、自分と直接の利害関係のあることは自分で決める権利を得なければならない。しかし、それ以上の決定権を求めてはならない。
- ③ 人間は自発性を発揮したり、責任を引き受けたりすることを求める。そのためには、自分のことだけでなく、自分の属する集団についても関心をもち、その集団の活動を自分のこととして考えられるのでなければならない。
- ④ 人間は自発性を発揮したり、責任を引き受けたりすることを求める。そのためには、自分自身に関わる事柄と集団に関わる事柄とを明確に区別して、両者を混同しないよう努力しなければならない。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第1問	問7	7	③	3

2014 年本試

問 8 次の文章は、サルトルとカミュの作品と思想とを説明したものである。

～ に入れる語句の組合せとして正しいものを、下の①～⑧のうちから一つ選べ。

『』のなかで、主人公が公園のマロニエの木を見て、存在の偶然性を発見する場面を描いたサルトルは、第二次世界大戦後、人間について、のあり方を示した。一方、カミュは、『シーシュポスの神話』のなかで、山の上から転げ落ちる岩を運び上げることを無限に反復するシーシュポスの姿を描き、人間の生がであることを示し、そのなかで生き続けることを人間の運命とした。

- | | | | |
|---|--------|------------|-------|
| ① | a 嘔吐 | b 本質に先立つ実存 | c 不条理 |
| ② | a 嘔吐 | b 本質に先立つ実存 | c 苦行 |
| ③ | a 嘔吐 | b 実存に先立つ本質 | c 不条理 |
| ④ | a 嘔吐 | b 実存に先立つ本質 | c 苦行 |
| ⑤ | a 第二の性 | b 本質に先立つ実存 | c 不条理 |
| ⑥ | a 第二の性 | b 本質に先立つ実存 | c 苦行 |
| ⑦ | a 第二の性 | b 実存に先立つ本質 | c 不条理 |
| ⑧ | a 第二の性 | b 実存に先立つ本質 | c 苦行 |

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第4問	問8	36	①	3

2013 年 追試

問 8 サルトルの次の文章を読み，その説明として最も適当なものを，次の①～④のうちから一つ選べ。

37

この部分につきましては、著作権処理中の為、
現在公開できません。

(『実存主義とは何か』より)

- ① 生まれながらにして自己に与えられた本質を，具体的な行動を通じて実現していくところに，人間に固有の自由は存する。
- ② どのような道徳に従うかを自分で決めるに際して，多数者による同調への圧力を完全に排除できなければ，真に自由な決断とは言えない。
- ③ 自己の様々な可能性を追求することは，それが他者の自由を損なっているという事実を顧みない，責任を欠いた態度である。
- ④ 自由はあらゆる価値の基礎にあり，それ自体が行為の目的なのだから，個人は自分だけでなく他人の自由もまた同時に求めるはずである。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 8	37	④	3

2011 年本試

問 2 「連帯」という言葉は 19 世紀以降様々な文脈のなかで用いられたが，サルトルにおいてそれはどのような主張と結び付けられているか。次の①～④のうちから正しいものを一つ選べ。

32

- ① 人間の決断は私的ではあり得ず，常に全人類への責任を伴う。しかし，この責任を回避せず進んで引き受け，社会的に連帯することが必要である。
- ② 人間は自分一人では真の自己に目覚めることはできない。だからこそ，実存的交わりにおいて他者と連帯することが必要である。
- ③ 人間相互の疑惑や不信によって生じた過去の戦争を反省し，人類の知的・精神的連帯のうえに平和を築くことが必要である。
- ④ キリスト教を中心とするこれまでの道徳は，強者に対するルサンチマンに基づいた，弱者による連帯が作り出したものである。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 5 問	問 2	32	①	2

2010 年追試

問 3 自由に関して、サルトルの主張として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。

25

- ① 人間の自由は、他者との交わりのなかで、愛と孤独の間を揺れ動きながら、互いの限界を認めつつ行動するところに存する。
- ② 人間の自由は、歴史のなかで行動する個人の衝動や情熱を原動力として、個人を統合した民族の精神において実現される。
- ③ 人間は、他人との戦いを通じて、自己の生命と幸福を維持し、自己保存の欲求を満たすために自らの自由を行使する。
- ④ 人間は、あらかじめ本質が定められている単なる物とは異なり、自らの自由な行為によって自己のあり方を定めていく。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 3	25	④	3

2006 年本試

問 6 「実存」を重視した思想家にサルトルがいる。彼の思想の記述として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。 28

- ① 日常的な道具は使用目的があらかじめ定められており、本質が現実の存在に先立っているが、現実の存在が本質に先立つ人間は、自らつくるところ以外の何ものでもないと考えた。
- ② 宇宙はそれ以上分割できない究極的要素から構成されているが、この要素は非物的なもので、それら無数の要素が神の摂理のもとであらかじめ調和していると主張した。
- ③ 生命は神に通じる神秘的なものであるから、人間を含むすべての生命に対して愛と畏敬の念をもつべきであり、そのことによって倫理の根本原理が与えられると考えた。
- ④ 人が罪を赦され、神によって正しい者と認められるには、外面的善行は不要であり、聖書に書かれた神の言葉を導きとする、内面的な信仰のみが必要だと主張した。
- ⑤ 誰にとっても成り立つような普遍的で客観的な真理ではなく、自分にとっての真理、すなわち自らがそのために生き、また死にたいと願うような主体的真理を追求した。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 4 問	問 6	28	①	3

2003 年追試

問 2 サルトルとヴァイツゼッカーの責任に関する主張の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選べ。サルトルについては に、ヴァイツゼッカーについては に答えよ。

- ① 人間の中で、最も生きがいを感じている人とは使命感に生きている人だと述べ、そうした使命感はまた、自分が生きていることに対する責任感でもあると示唆した。
- ② 自分が関与した状況から不可避免的に生じた罪責を限界状況と名づけ、この限界状況から目をそらし、そうした責任を引き受ける覚悟をもたない人は、良心のない人間であるとした。
- ③ 自己本位の立場に立てば、自己の個性の発展を願う人も、自己の権力、経済力を示すことを願う人も、同時に、他人の個性を尊重し、義務と責任を重んじなければならないと論じた。
- ④ 老若を問わず、全員が過去の出来事の結果にかかわり、その責任を負っていることを、自国の人々に向かって指摘し、過去に目を閉ざす者は、現在にも目を閉ざす者であると説いた。
- ⑤ 人間はどこまでも自由な存在であると考え、どんな行動についても、自分の選び取ったこととして、人類全体に対して、その責任を負わなければならないと主張した。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 2 問	問 2	12	⑤	2
第 2 問	問 2	13	④	2

2000 年本試

問 5 現時点での自己のあり方をその都度越えていくという性格に関連して、このような自己のあり方を説いた今世紀の哲学者の中で、サルトルについての記述として最も適当なものを、次の①～④のうちから一つ選べ。 34

- ① 自己の死を自覚することによって、日常性に埋没した無責任で匿名的な「ダス・マン」のあり方を乗り越えていく態度を説いた。
- ② 人間を根源的に自由な存在として 捉え、たえず未来へ向けて自己を投げ出し、新たな自己を創造していくあり方を主張した。
- ③ 死や苦のように克服できない究極の壁を限界状況と名づけ、これを直視することによって、人間は自己を包括する超越者の存在を感じるとした。
- ④ 人間の選択や思考は身体を媒体にしてなされるものだと考え、身体におけるくみ尽くしがたい経験を繰り返し取り上げ直す可能性を示した。

問題番号	設問	解答番号	正解	配点
第 5 問	問 5	34	②	3